ふかまちのまど
第七十号　二〇〇一年二月一日
発行元　深町　町内会連合会
連絡所　☎六三―三八八七

PTA会長時の思い出

広川　弘之

取り組んだ「複式学級」

岡本会長のあと二年間PTA会長を引き受けた。

今振り返り、曲がりなりにも会長職が務められたのも、皆様方の助言、ご協力があったことであり、改めて感謝している。

当時の小学校を取り巻く問題点といえば、一つは赴任して来られた先生が病気になるという、不可解な問題でした。これといった解決策が見い出せず、結局神頼みということで祈願を行った。

もう一つの問題は、深小学校においても、一気に複式学級が二つ発生する事態となったことである。

複式学級の長所もあろうが、それよりも教育上問題となる不具合の方が多く発生することである。小規模校においては、先生が二人少なくなるということは重大なことである。年間行事においても大きな負担となり、児童達の安全面にも大きな影響を与えることになる。

定例役員会でも主要議題となり、PTAとして具体的活動に向けて検討した。地域においては、結婚して町で生活している人の実家を訪問し、児童数を一人でも多くしたい気持ちを伝え協力をお願いした。

一方市教育委員会に対しても坂井校長、PTA役員数名が出向き、教育長にも協力をお願いした。

教育長としても心情的に理解出来る点があるので、県の方にも協力に動いてみるという言葉をいただいた。

後日、坂井校長より、市教育委員会よりの連絡では、一度に二つの複式学級というのは問題もあるということで、一つの複式学級になりそうだ、とのことであった。

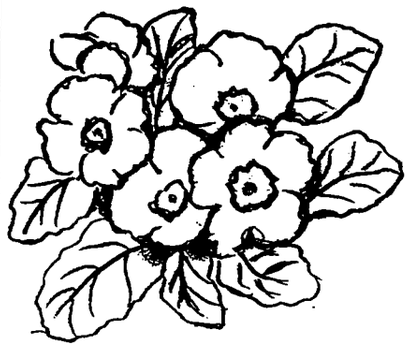
後日お礼の為市教育委員会を訪ね、教育長にも心底感謝の気持を伝えた。雑談の中で、「いろいろお願いに来られる人は多いが、お礼に来られる人は少ないですよ」、と言われた。

深小学校PTAとしての行動が間違っていなかったことを確認できたことは、大きな収穫であった。

あの頃より、深町も大きく様変わりしてきた。県道の改修も進み、如水館高校の深町への移転。サンライズ大池の新設、新築家屋も増え、必然的に子供も増加していると思われる。

子供達の明るい声を聞く度に、平和を感じる今日この頃である。これから益々発展するであろう深町を、皆で支え合い明るい町に育てていきましょう。▲▲

十五代（平成二・三年）会長



プリムラ

喜代子

豪華なのには驚きました。この辺りは大理石が豊富で、民家・商店のアーチ型玄関等大理石の家が多く、街の舗装道路も大理石のところもあるくらいです。

ここはギリシャ発祥の地と言えるだけあって、市街道路のあちこちに芸術色豊かな彫刻が多くあり、総て大理石です。

又、アテネには、千光寺山位の丘の上に、アクロポリスの古城跡が現存していますが、建築物は壊れて昔を偲ぶ大理石の城壁・柱等が残って居り、観光地として有名です。

市街地の電力・電話線は全て地下配線で、表通りには一本の電柱もありません。又、家庭の表通りの改造は、観光を維持するため一切禁止されています。同じ目的で、各家や、高層アパートの前面には植木鉢くらいは並べられますが、洗濯物や蒲団を出して乾かすことも禁止されています。▲▲

「近東伊太利航路」の思い出（4）

秋本　俊之

台湾にさらばを告げ、今度は広い南支那海を南下します。数日経つと、その中にマライ半島が見えて来ます。南端に位置するシンガポールは、迷彩措置をした要塞なので、船が入港しても上陸は禁止され、特別の用事がある者のみ（船長・事務局長等）が上陸可能です。そこで三、四日の荷役作業を終へ、マラッカ海峡を通過してコロンボへ航行をつづけます。

当時、最早英国とドイツは戦争状態に入っていたのです。当時の世界の海軍力は、英・米・日が、五・三・三の兵力保有制限を受けていたので、日本船といへども交戦国と間違へられて爆撃される恐れがあるので、船のハッチ（船倉）のカバーの上に、八畳敷程の日の丸の旗をかぶせてライトで照らし航行を続けます。

印度洋は赤道直下なので、風の無いベタ凪が続きます。五十メ前後の船底で石炭を炊くファイマン（火夫）の所へは、ベイーター（風取器）からの風らず、二時間のワッチ（終わって、デッキに上ってみると石炭の灰の埃で、顔が真っ黒になり、誰か見分けがつかない位になっています。

今度はセイロン島のコロンボ、サウジアラビアの南端のアデンから、レッドシイ（紅海）を北上します。

暑い紅海を航行中正月を迎えたので、デッキの上で餅つきをしたことが思い出されます。

サウジアラビアは、草木の無い峨々たる広大な黄色い砂漠地帯なので、そこから流れ出る水に依り海の水が黄色くなり、レッドシイと名付けられました。

航行中の左舷の方向はアフリカ大陸で、それを眺め乍ら北上を続け、陸地を掘り割ったそのままの川の様なスエズ運河を通過します。途中の陸の上にこの運河を作ったフランス総督レセップスの銅像が立って居ります。

運河を通過すると、地中海のポートサイドの港に到着寄港し、それよりハイファーベイルートーギリシャのアテネに到着します。アテネは第一回オリンピックの開催地で、競技場のスタンドは総て大理石で作られている

郷土誌　八月発刊予定

三原市合併五十周年記念の新修「深郷土誌」の編集は、八月発刊予定で今校正に入っています。

編集室

如水館8位入賞

第十一回女子高校駅伝

去る十二月二十六日、都大路で行なわれた第十一回女子全国高校駅伝競走大会で、如水館は堂々八位入賞を果たした。

創部四年目の快挙で、見事な成績。次への更なる期待も大。

謹んでお悔み申しあげます

★為清　夏子様　七十六歳　一月八日
★新谷トシコ様　九十三歳　一月九日

二月　町内各種団体行事予定

◆小学校（幼）
▼健康診断――3日
▼竹馬大会――5日
▼冬期学園（五・六年）8・9日
▼新入園児保護者会――17日
▼参観日（小・幼）――18日
▼新一年生入学説明会――24日

◆女性会
▼親睦会　上組――10日
　中組――12日
　下組――13日

「新春ふれ合い広場」のお礼

去る一月二三日（日）「新春ふれ合い広場」に際しましては、寒中しかも雨の中をご協力頂き、深町の伝統行事を経験することができました。

高く大きく燃え上がるとんどの炎は子どもたちの心にも燃え続けることでしょう。

どうか、今後とも幼稚園・小学校にご支援を頂きますようお願いいたします。

深小学校

展望席

車を運転しながら反省をこめて思うことは、「他人（人・車）への思いやり」です。朝夕の通勤時間帯に市道から県道に出たり、県道を右折するのはたいへんです。勿論人が横断することも。そんな時、運転者がほんのちょっとブレーキに足をかけるだけで心が通い合えるようです。

▼深小学校に通勤者の方から、よく電話がかかるそうです。朝の登校時、子どもの横断待ちで停車し、終わったので発車しようとする時「ありがとうございました」、と一礼してくれる子どもの姿が何とも清々しく嬉しかったので――との内容だそうです。これは児童の自主性というより、先生の教育的配慮の結果と思えるのですが：。▼狭い道で離合がむつかしい時、広い所で待つことがあります。こんなとき、「ありがとう」の意志表示で片手を挙げる、小さくクラクションを鳴らす、方向指示器を点滅してくれる人等様々ですが、やはりうれしいものです。▼高齢者や心身に障害をもつ人に対する思いやり、気遣いは、健常者にとっては当然のこと。しかしこれはどこまでも道を譲るドライバーのように、自然体でありたい。戦後このかた、地域社会で、心の交流が失われたようです。人として最も寂しいことは「孤独」。互助・思いやりの心は地域社会の安全弁。

深の歴史余話（三十一）

高崎　壽郎

深の物産（1）

文政八年（一八二五）頼杏坪が編纂した芸藩通志の中に、深村の物産として、茵陳、木通、桔梗、松割物、（丸太、板、貫）栗丸太をあげている。

茵陳は「かわらよもぎ」のことで、黄疸に効き、木通は「あけび」のことで利尿剤として用い、桔梗は「ききょう」のことで、腹痛に効く。

このことからも、江戸時代は薬草や木材が深村の特産品だったことがわかる。

深は明治になっても、米麦の生産や林業が主な産業であった。ここでは、盛んだった産物をとりあげる。

イ草

畳表にする植物である。明治十八年（一八八五）頃初めて深で栽培され、昭和十二年（一九三七）頃最盛期を迎えた。

太平洋戦争中は、肥料不足で作付中止となっいたが、昭和二五年（一九五〇）頃復活した。

寒い冬の日、氷を割って一株一株苗を植付け、炎暑の土用前後に取り入れる。

夕方から刈り始め、電灯の光をたよりに夜遅くまで作業は続く。刈り取ったイ草は染土（いどろ）につけ立て掛けておき、夜明けを待って天日で乾かす。十一時ごろ、ひっくり返して又、乾かす。それを夕方とり入れる。この作業のくり返しで一家総出の重労働だった。

乾燥中、雨に当ると二束三文になるので、天気予報には特に敏感になった。

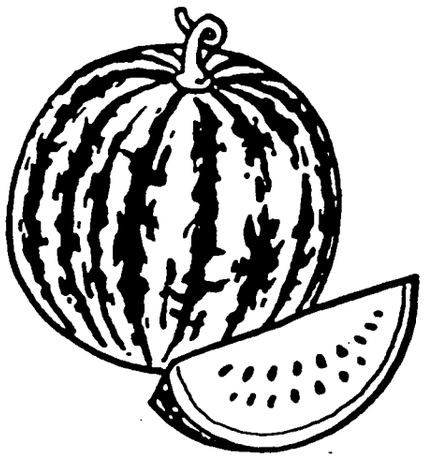
この地方のイ草を原料にして打ったものを「備後の表」といって品質もよく高価で取り引きされていた。

尚、イ草の染土は深産出のものが最上質との定評があったが、現在は産出していない。

余談だが、畳表を一日に二枚打つと「よい嫁」といわれ、それに達しない者は肩身が狭かったという。

戦後のある時期には、約半数の農家がイ草を作っていたが、イ草の生産が全国的になり、備後の表は質は兎も角、量では太刀打ちできなくなってきた。

そして、昭和五九年（一九八四）深の生産者は、四戸までに減り、地元で品評会もできず、業者には安くたたかれるので、百年以上の歴史のあったイ草づくりは、翌年には姿を消した。



かっての深特産西瓜

西瓜

西瓜は明治四四年（一九一一）に初めて試作され、昭和二年（一九二七）頃から市場へ出荷されるようになった。

昭和十年（一九三五）黄西瓜の栽培が始まり、その美味なることが世に知られた。

戦後も又、栽培が盛んになり、昭和三十年（一九五五）頃には、富研号の名称で広く知られ、市場の評判もよく高価で取り引きされた。が、連作をきらうため生産は下り坂になった。

そして、ハウス栽培でいつでもなんでも食べられるようになった現在、深の西瓜は自家用ぐらいになり、昔の面影はない。▲▲

ばかりの昭和二〇年四月に深へこられたようです。

「学校近くの地続きの寺」とは、聖光庵（現町民会館）と思われます。

疎開地を訪ねて(1)

西田　勝彦　＜元疎開児童＞

私の学童疎開は、終戦の年、昭和二〇年四月～九月にかけてだと思う。六年生の帰阪と入替えに深田村へお世話になったと思われる。

今回、母校の大阪市立海老江東小学校を訪れ、校長・教頭先生にお尋ねしたが、五四年を経過、当時の名簿等直ちに見つからぬとのこと、それでも昭和五八年刊行の創立五〇周年記念誌に、引率の先生や、六年生であった方の思い出が載っており、深田村の皆様に迎もお世話になったと記述があった。

偶々、家内の叔母が三原におり、その見舞いを兼ね、事前に尾道市役所へ電話で問い合わせ、深は現在三原市に併合されていると聞き、早速十二月十二日、十三日の行程で尾道～しまなみを巡る旅を予定。

十二月早朝、カーナビに三原市深をインプット。一路貴地を目指した。

午前十時、尾道インターを出るや如水館高校に到着。記憶にあるお寺が見当たらない。

近くの方に尋ね、その方の案内で大通寺へ。奥様に座敷に通され、ストーブとお茶の接待を受け感激ですが、学童疎開生を受け入れていない旨伺いガッカリ。

更に、金剛寺を探し当て、道路より入った処で、山並みや田圃の感じは記憶に誓いのですが、院主は「当寺ではない」と申される。

昼前、取り敢えず再度を期し、三原市の病院へ、そして須波からしまなみ半島へ。耕三寺や平山郁夫記念館を経て因島泊まり。

翌朝、島内観光とスケッチの上、午後尾道千光寺公園へ。

前日、因島公園で妻が島人に、学童疎開先を尋ねている旨を話した処、御調町役場を先ず尋ねるべしとアドバイスされたことより、午後三時ごろ役場を尋ね、税務課の住宅地図の写しを頂き、示されたのが深小学校。昨日前を走った筈。

ここで小林校長にお尋ねすると、「当時、深国民学校に宿舎が併設されており、そこに学児疎開さんは寝泊りされてましたヨ」と。小生の記憶「学校と地続きの寺」は寄宿舎であったらしい。小林校長は「深小学校は以前金剛寺の傍にあったと聞いている」と仰言ったのだがと伝えると、終戦の頃老婦人の弟さんが、深国民学校に在校していたので「現所在で間違いない」と教えられた。

現所在地の前に川があることより、道路で様変わりしているが、屹度、金剛寺辺りの風景が拡がっていたに違いないと、思い出と重ね合わせ駆け足での深町探訪を日暮れと共に終わったのである。

続く▲▲

西田さんは、二年生になった

会いし「学校は建て変ったが、受け入れた学校」と聞かされ安堵すると「寺は金剛寺の筈」とのことに、再度おもかげを探して寺のあたりへ。

丁度、畑仕事から帰って来られる老婦人に声を掛けと元気が出た。仕事の疲れで眠っている人が居てもそっとしていた。

私は、左官の仕事をしていたので夏はよく遅刻した。時には仕事をしている前を生徒が通ることがあったが、ちょっと恥かしかった。どろんこの私を見られたくなかった。

冬は九時半から十時頃家に帰るので、私一人の食事を作る母は辛かったと思う。コタツだけの我家は寒かった。

学校行事の想い出は　ソフトボール臨海学校で鞆の浦　野呂山キャンプ　唐子浜の海水浴　九州の修学旅行等　家族行事のようで皆が楽しんだ。

勉強は数学と理科以外はよくわからず、辛かったが今の私はその頃の体験が大変役立っている。先生が夜間部の生徒は人間関係に特別なものがある、と言われていた。

その先生は夜間部の先輩で、昭和二十八年三月の卒業生で、数年前まで広島女学院大学に在職されていた。

母の姉も私が在学中舎監として勤務していて、私を励ましてくれ元気が出た。私は、卒業して三回転職し今に至っているが、雑草魂のようなものがあり、自己破産が身近にあるのに呑気に見える生活をしている。

今、進学、就職も最終追い込みの時と思うが、人生は長い、「大器晩成」のことばもある。焦らず頑張ってほしい。▲▲

「夜学」

坪見　博文

「夜学」「苦学」と聞くと暗い感じがする。ところが、である。

私は、昭和三十年中学を、三十六年三月に河内高校定時制を卒業した最後の卒業生である。

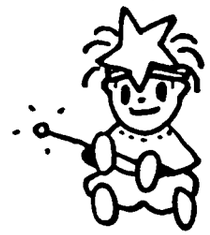
年齢は十歳くらいの幅があり、職業も三原三菱重工、帝人、東繊、広島の佐竹工業、大工、左官、配管工等色々。

先生は昼間の先生が多く、夜間だけの先生は二人だったと思う。夜間部の先生は昼間部の生徒より成績が良いと誉められる

●春夏秋冬●

梶谷　マサヨ

この世をば　苦の土と言いし　人のあり
佛にすがりて　眞実に生きん

春未だ　浅き水面に　アヒルたち
仲よく泳ぐ　声をかけおり

幽明、境異なりて　二十五の忌を迎う
想いは逝きし　息の齢なり